

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River

ウ

ナギほど日本人に関わりの深い淡水魚はありません。関わりが深いといっても、いつも魚屋にあるわけでもありません。おいしい魚だから、ウナギのかば焼きのおいしさを思い出すから、身近な魚に感じるのかもしれませんが、ウナギは最近極端に少なくなりましたので今の子どもたちにはあまりなじみがないかもしれません。が、以前子どもたちがよく、川で遊んでいたころは、川からウナギを捕まえてくれば家族の人たちが大変喜んでくれたものです。簡単に捕まらないからです。小学生のころは、ツケバリ、ウナギテボ、アナズリなどで捕ったのですが、3〜4匹も捕れたらかば焼きをしたり、ウナギ丼をしたりして家族みんなで分け合っていました。

日本にいるウナギはウナギ目ウナギ亜目ウナギ科ウナギ属です。日本に住んでいるウナギを特に「日本ウナギ」と呼んでいます。が、朝鮮、台湾、中国にも分布しています。

淡水魚と言いましたが、これはどうも生態が複雑で、海に行ったり、川に行ったり産卵場所も分らない謎の多い魚なのです。ギリシャの哲学者アリス

トレスの著書にも泥土から発生するという記述があるくらいです。日本では、江戸時代はヤマイモが変わつてウナギになるといわれていたようです。これはウナギもヤマイモも栄養価が高いということからうなずけないこともあります。

海で産卵孵化し淡水にさかのぼってくる魚を降河回遊魚といいます。ウナギは遙かフィリピン海溝の深海で産卵すると考えられていました。しかしその場所は今もなかなかわかりませんでした。ところが2006年2月、東京大学海洋研究所の研究チームが日本ウナギの産卵場所がマリアナ海溝のスルガ海山付近であることを突き止めました。2〜3日で孵化した仔魚はレプトケファルスという柳の葉のような、平たい透明な幼生となり、やがて変態して親と同じ形をしたシラスウナギとなつて川をさかのぼるのです。それまで3年かかるといわれます。シラスウナギの体形は成魚に近い形をしています。シラスウナギの体はほぼ透明で全長5センチくらいです。シラスウナギは黒潮に乗って東南アジアの沿岸にたどり着き、川をさかのぼつて5〜10年かけて成長し、その後また川を下つて産卵場所へ向かいます。

す。その経路についてはまだよく分かっていません。

ウナギは世界中で20種ほどいますが、ヨーロッパウナギ、アメリカウナギ、オーストラリアウナギは近縁種で、デンキウナギ、ヤツメウナギ、メクラウナギなどは別の種類です。オオウナギもカニクイといつて日本では南部にいますが別の種類です。

ウナギはえらの他に皮膚呼吸もできるので、皮膚が濡れていて周囲が湿気のある所であれば、雨の日など住んでいる所から別の水域に移動することもできます。濡れていれば切り立った絶壁でも体をくねらせて登ることができるので「ウナギ登り」という言葉はここから生まれたのではないでしょう。か。臭覚が非常に発達していて犬に匹敵すると言われています。薬効にも優れ、昔から鳥目（夜盲症）の薬と聞かされていました。これはビタミンAが豊富に含まれているからです。他にもビタミン類がたくさん含まれています。貝原益軒は夏バテの予防のために土用丑の日にウナギを食べよう勧めたといわれています。

歴史調査の楽しみ方

志口永城跡

6

大田 幸博

（元・菊池川流域同盟副委員長）

調

査も、大詰めを迎えました。この段階になると調査漏れのカ所がないか、とても気になります。今後、再調査の機会はまずありませんので、益永浩仁係長と現場を隅々まで歩いて、縄張り（なわばり）の把握に努めています。今月は、2回目に取り上げました「土橋」の続編です。

〔北側小段〕東側にあたるI郭の西縁下は、標高73m〜79mの間が絶壁になっています。志口永城跡に特有な地形です。それから下部は造成されて、標高61mまで小段（こだん）地形と半月状の削平地になります。造りは、上位が等高線に沿っており、下位が谷部を横断しています。上位は、犬走り（いぬばし）と足がかり用のステップと思われるます。

北西側の区画は、牛舎の東下になります。報告済みの小段群（5段）の北側にあたります。間に堅堀（たてほり）を挟んで、8段の小段を数えます。急傾斜地に造成されているために、各段の高低差が非常に大きく、最大で4.6mもあります。登り下りに大変な地形です。さらに、各段の法面（のりめん）は、急峻に削り落とされていますので、

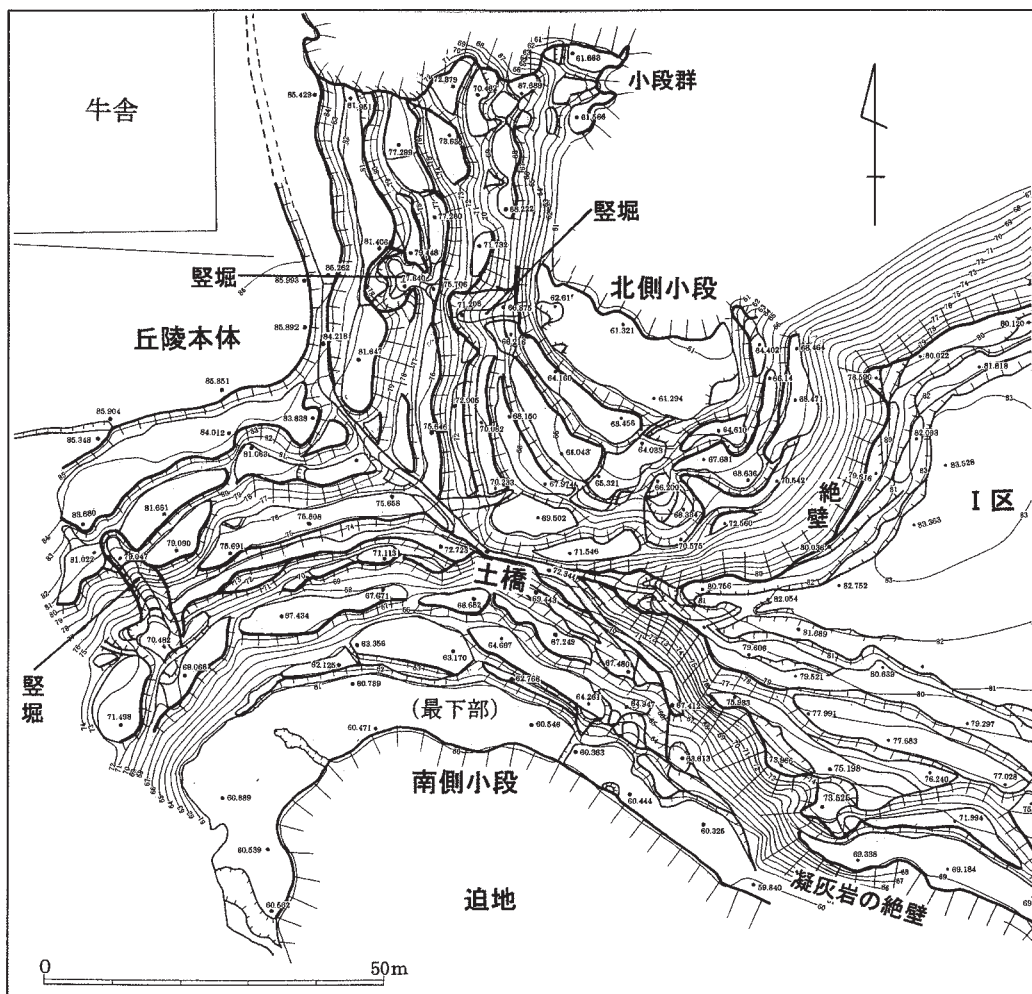
下から見上げると、まさに、要塞（ようさい）という感じがします。

〔南側小段〕中央部は、城跡の南西側を取り囲む迫地（さくち）に繋がります。最下部は、幅広い削平地で、北側に凸の状態にあります。最大幅は、西側寄りで、15mを測ります。中央部から西側は湿地になっています。この区画は、8段目にあたり、土橋から11.8mの高低差があります。

東側は、I郭からの斜面が凝灰岩（ぎょうがいがん）むき出しの絶壁になります。I郭南西側的小段群からは、最大で9mの高低差があります。この状態は、I郭の南縁下まで続いており、強烈な印象を与えます。西側には、北側小段と同様な堅堀（たてほり）が下っており、北側小段のそれと同様に、土橋部分を南北両側から挟み込む形になっています。

このように、土橋の両斜面は、実に手の入り込んだ造りになっています。築城者の思い入れが伝わってきます。

〔二言〕10月15日の調査日、蟬が、とうとう鳴きませんでした。いよいよ、秋が深まったことを実感しました。ボトルの水も、もうすぐ、熱いお茶に変わります。



土橋と北側・南側小段周辺の測量図